

志賀直哉「城の崎にて」の形成

——「城の崎にて」から「城崎にて」へ——

日本文学／教授 寺杣 雅人

はじめに

かつて拙稿「本文批評の問題点——横光利一の初期作品から——」⁽¹⁾において、近代文学作品の本文がきわめて危うい状態にあることを指摘した。名作中の名作と目される志賀直哉「城の崎にて」も例外ではない。

いま私たちが目にし、研究対象ともしている「城の崎にて」の本文は、教科書⁽²⁾や最新全集⁽³⁾所載の本文であつても、あるいは文庫本⁽⁴⁾や『志賀直哉集』⁽⁵⁾というような名の作品集⁽⁶⁾に収録された本文であつても、著者の最終的な修訂を受け入れていない⁽⁷⁾。そのうえそこには著者の関与しない、誤った段落分けさえ含まれている⁽⁷⁾。

「城の崎にて」の「もつとも信頼さるべき本文」⁽⁸⁾は、別に求めなければならぬ。危うさの源にあるのは、本文の等閑視である。近代短篇小説中の不朽の名編として注目されてきた「城の崎にて」でさえ、その本文が明確には捉えられていない。だれもその本文をしかと見ようとしていないのである。ゆゆしき事態といわねばならない。

「城の崎にて」の本文を正視しようとすれば、昭和十五年刊の『映山紅』（限定版、草木屋出版部）所収本文にすぐに行き当たるであろう。「城の崎にて」はここで標題の表記を「城崎にて」と変え⁽⁹⁾、それまでの加筆訂正を受け継ぎつつ、段落分だけで六箇所、語句で二十九箇所、句読点でも十一箇所の新たな異同を加えている⁽¹⁰⁾。そしてこの本文をさらに吟味し、点晴をほどこしたのが、昭和二十一年刊の『映

山紅』（普及版、全国書房）所収の「城崎にて」である。「城の崎にて」において、求めるべき本文の底本はこれであろう。「城の崎にて」⁽¹¹⁾は「城崎にて」の高みに向かつて徐々に歩を進めてきているのである。

はじめの「城崎にて」で発生し、後の「城崎にて」にも継承された異同から二例のみ挙げてみる。「城の崎にて」の初出は大正六年五月の『白樺』誌であつた。翌大正七年一月の『夜の光』への初収時に、主人公「自分」が散歩中にたぐさんの「山女」（やまめ）を見るという記述が加わり、それが「城の崎にて」においてはずっと引き継がれてきた。ところが、この「山女」は「城崎にて」では「鮠」（はや）に姿を変えている。また、「城の崎にて」には、奇妙な動きをする一枚の桑の葉に興味をもち、主人公がそれを下から観察する有名なくだりがあるが、ここには初出以来「然し好奇心もあつた」という一文がはさまれていた。その一文が「城崎にて」にはない。

著者はなぜ「山女」を「鮠」と改めたのか。一文の消失も印刷ミスによる脱落ではなく、著者が最終的に不要と判断した結果ではないか。これらが著者による意図的な改変であるなら、その意味を説明すべきであり、そこからこの（小説の神様）ともよばれる著者の文体や創作の方法を追究するという新たな研究課題も生まれてくるであろう。

しかし、本文が見えていない「城の崎にて」研究では、そもそもこのような疑問や課題が浮かび上がってくることはない。最新の『志賀直哉全集』の解説にお

いても、『夜の光』（大正7年）への初収時に二文が追加されていることや九卷本全集（昭和13年）¹²への収録の際に一部で表記を改めていることの指摘はあるが、『映山紅』への言及はない¹³。

まず「城の崎にて」の本文とじかに向き合う必要がある。文体研究にしろ、作品研究にしろ、すべてはそれからであろう。

本稿は、「城の崎にて」の初出本文から最新全集収録本文までの主要八本文を比較し、これらの本文の有りようを系統を明らかにしようとするものである。

なお本文の比較は、本文番号を用いた拙案の本文校異表によって行う。これによれば、多数の本文を一度に俯瞰でき、共時的かつ通時的な本文の観察と分析が容易となる。本稿は、より科学的で実証的な本文批評の提案でもある¹⁴。

一 本文校異の方針

まず、本文校異を行う「城の崎にて」の主要八本文は、次に示す通りである。

- 1 『白樺』第8巻第5号（白樺発行所、大正6年5月）掲載初出本文
- 2 『夜の光』（新潮社、大正7年1月）所収本文
- 3 『寿々』（改造社、大正11年4月）所収本文
- 4 『志賀直哉全集』第3巻（改造社、昭和13年2月）所収本文
- 5 『映山紅』（草木屋出版部、昭和15年12月）所収本文
- 6 『映山紅』（全国書房、昭和21年12月）所収本文
- 7 『志賀直哉全集』第2巻（岩波書店、昭和30年6月）所収本文
- 8 『志賀直哉全集』第3巻（岩波書店、平成11年2月）所収本文

1は「城の崎にて」の初出本文であり、著者の関与によって、あるいは著者のあずかり知らぬ力によって変遷していく本文の起点である¹⁵。1の後は2～7の順に刊行され、時間的に最も後に位置するのが8となる。

ただし、この並びは著者の関与の順ではなく、8が本文の形成順においても最も後置されているというわけではない。著者が最後に関与し、異同を発生させた

本文は、これは厳密な本文校異の結果からはじめてわかることであるが、先回りしていえば、6の普及版『映山紅』所収の本文である。7と8の本文は形成順では明らかに5および6に先立っている。

1～3の間には、これら以外の「城の崎にて」の本文は刊行されていない。このような場合、2の底本は1しかなく、また次の3は多くの場合1ではなく2を底本として形成されることになるが、初出本文を含むこれら三本文の関係も、これから行う本文校異によって明らかとなる。

3～8の間には、これら以外の本文が多数刊行されているが¹⁶、3の後には著者初の本格的全集である九卷本全集に収録された4を取り上げた。この全集の編纂に際して、「古い興味を失った作品」であっても「叮嚀に」読み、自身で「校正」を行ったという著者自身の発言もあり¹⁷、「城の崎にて」の本文校異においても外すことのできない本文であろう。

5と6は、『映山紅』という同名の作品集に収められ、「城の崎にて」という同じ表記の標題をもつ本文である。この二つの「城の崎にて」の本文は「城の崎にて」の系統図にどのように位置づけられるのか、また同じ標題の両本文はどのような関わりをもつのか、これらは「城の崎にて」の本文研究にとっての大きな課題である。

7は、著者の生前に刊行された最後の全集が収録する本文であり、最新全集収録の本文である8は、一般的にいえば、「城の崎にて」という本文の帰着点である。この7と8の二本文を加え、以上の八本文の校異を行うこととする。

これらをもって「城の崎にて」の主要八本文とすることは、結果からみても妥当であつたと考える。

校異の方針および校異結果の示し方については次のように定める。

一、上記八本文の「標題」、「段落」（改行の有無）、「文」（句点・疑問符の有無）、「語句」について校異を行う。

二、「語句」の校異においては、語の違いにのみ留意し、表記については考慮し

ない。すなわち漢字・仮名の別、漢字字体や仮名遣い・送りが別の別、ルビ・傍点の有無はここでは取り上げない。それは煩雑さを避けるためでもあるが、これらは著者以外の編集・印刷に関わる他者によって定められることもあり、著者と本文の関わりを知るにはかえって不適切な情報となる可能性があるからでもある。（ただし、「標題」の校異においては、「城の崎にて」か「城崎にて」であるので、表記に留意する。また、校異表への語句等の記載にはルビを略すが、ルビによって「語句」の別を判断しなければならぬ場合はルビを付す。）

三、1～8の本文を刊行順に閱していつてある本文に異同が認められたとき、校異表の該当箇所はその本文の番号を○で囲んで記入する。異同のある字句等は同じ列の最下欄に設けた「異同箇所」に示す。

四、「異同箇所」に異同のある字句等が記入されるとき、その字句等に対応する初出本文の字句等を1の欄に記入し、校異表の最上欄に通し番号を書き入れる。これは異同箇所数の把握や説明の便宜に供するためである。

五、1に字句等のある2～8の本文で、1と同じ字句等をもつ場合は、該当箇所1を記入する。異同が発生した本文と同じ字句等をもつ場合は、異同の発生した本文の番号を○で囲まないで該当箇所に記入する。

六、「頁・行」は、本表の利用上の便宜を考慮して8の本文における当該字句等の位置を示す。

二 標題の推移

標題は次のように推移している。

表1 標題の推移

本文番号	1	2	3	4	5	6	7	8	異同箇所
標 題	城の崎にて	1	1	1	⑤	5	1	1	城崎にて

1・2・3・4および7・8の六本文の標題は「城の崎にて」で、時間的には

その間に位置する5・6の二本文は「城崎にて」とあって仮名「の」の一字がなく、表記が異なっている。標題だけでは本文間の類縁性について云々することはできないが、最新全集の「書誌」によっても「城崎にて」という表記の標題はこの5・6しかない。両者は本文として密接な関係にあり、6の標題は5を受けている可能性がある。また新書判全集の本文7と最新全集の本文8は、5・6との関係は薄く、その底本はこれらを飛び越えて1～4の流れのなかにあるのではないかというおぼろげな推測もここに生まれる¹⁸⁾。

三 段落と文の推移

(1) 段落の推移

八本文のもつ段落数は次の通りである。

表2 段落の推移

本文番号	1	2	3	4	5	6	7	8
段落数	10	10	10	11	16	11	11	11

1・2・3の三本文が10段落から成り、4・6・7・8の四本文は11段落から成っている。5の一本本文は飛び抜けて段落数が多く16段落ある。

10段落の三本文と11段落をもつ四本文は、段落数が同じであってもそれぞれ分節の仕方まで等しいというわけではない。改行箇所の異同をしめす次の表をみれば、それは明らかである。

表3 改行箇所の推移

No.	頁・行	1	2	3	4	5	6	7	8	異同箇所
5	4	3	2	1	1	1	1	1	1	
6	6	5	5	4	1	1	1	1	1	
13	5	10	9	13	13	10	10	10	10	
	自分は	其羽目の	自分の	〔改行〕一つ	②	②	②	②	②	
	1	1	1	2	2	2	2	2	2	
	1	1	1	2	2	2	2	2	2	
	1	1	1	2	2	2	2	2	2	
	⑤	⑤	⑤	2	2	2	2	2	2	
	1	1	1	2	2	2	2	2	2	
	1	1	1	2	2	2	2	2	2	
	1	1	1	2	2	2	2	2	2	
	〔改行〕自分は	〔改行〕其羽目の	〔改行〕自分の	一つ	〔改行〕	〔改行〕	〔改行〕	〔改行〕	〔改行〕	

9	8	7	6
9・3	8・16	7・13	7・3
自分は	「フエータルな	然し	「殺され
1	1	1	1
1	1	1	1
1	1	1	④
⑤	⑤	⑤	1
1	5	1	1
1	1	1	4
1	1	1	4
「改行」自分は	タルな	「改行」然し	「改行」「殺され

たとえば、1と2は段落数は10で同じだが、それは初出本文1に対して、2では1箇所（1）で改行がなくなり、1箇所（2）で新たな改行が加わって差し引きゼロとなったからである。

3は改行に関しては2とまったく等しく、2の9箇所の改行がそのまま踏襲されている。そのことは、改行の異同を表す本文番号の並びが2も3も「22111111」となっていることでも知ることができる（○囲みは異同の新出をあらわしているが、ここでは不要なので②は2とする）。

4・6・7・8の四本文は11段落であるが、その内容は、4・7・8と6で異なる。前者は、改行の状況を本文番号であらわすと「221114111」となり、後者は「2211111151」となっている。それは、前者にある1箇所（6）の改行が後者になく、後者にある1箇所（8）の改行が前者にはないからである。

さて、ここでこの前者にあり後者にはない改行、すなわち4で発生した異同（6）には大きな問題があることを指摘しておきたい。この4で改行されることとなった箇所は、3の本文では、次に示すように、直前の一文の句点がちょうど行末に打たれており、さらに次の一文が「殺されたる范の妻」というカギで囲まれた言葉で始まるため、行頭の一字目にはじめのカギ（「」）が来ている。しかもこの二文の間で頁が改まり、二つの文が頁の裏表に別れて印刷されていた。3の当該箇所印字を次にそのまま再現する。

書いた。自分はそれに范の氣持を主にして書いた。然し自分は今は范の妻の氣持を主にして仕舞に殺されて今は墓の下にある、その静かさを書きたいと思つた。	「殺されたる范の妻」を書かうと思つた。それはたうとう書かなかつたが自分にはそんな要求が起つてゐた。其前からかゝつてゐた長篇の主人公の考へとはそれは大變異つて了つた氣持だつたので弱つた。
--	--

これでは前の文からも後の文からも、改行されているかどうかを判断するのは難しい。前の文の行末に空きがあれば、直後で改行されていることがわかるし、後の文が文字で始まつていれば、初めの文字が一字下げになっているかどうかで改行の有無を判断することができるだろう。しかし、いずれもそうはなっていない。外見からすると、段落分けがなされているととれるし、なされていないととれるのである。

かりに4が3を底本にしていたならば¹⁹⁾、その編集・印刷工程で、改行されているか否かを判断しにくい本文に直面することとなるだろう。

おそらく直面したのであろう。4はこれを段落分けと解し、二文は別の段落に分節されることになったと考えられる。それには、あるいは二つの文が別の頁、しかも裏表の関係にある頁に別れていたことが影響したのかもしれない。そしてその結果、この二文の間の段落分けが7にも8にも、そして現在私たちが目にするすべての「城の崎にて」に踏襲されることにもなったのであろう。

こういう場合は遡って信頼できる本文に拠るべきである。そこで遡ってみると、2でも1でもこの二文は同じ段落の中で連接している²⁰⁾。ならば1・2を受けた3の二文の間にも段落分けはなかったはずと考えるべきである。しかし、4はそういうように遡ることはしなかったのであろう。

ただし、表3をみると、2と5では著者の修訂が段落分けにまでおよんでいる。ということは、4において著者が新しい段落分けを試みている可能性もなくはない。しかも「著者生前の意向の十分に加わつた」²¹⁾とされている7がそれをそのま

ま引き継いでいる。4のみならず3でも著者による段落分けの異同が発生していたのではないかと異論も当然ありえよう。

ところが、これは後に詳説するが、「城の崎にて」に関していえば、7において著者の「意向」は本文の一字一句にも反映していない。これはこれまでに見た表3でもいえるが、この後の表4・7、そして表9を見れば一層あきらかとなる。7での踏襲を根拠として4での段落分けを著者の「意向」と見ることはできない。そして何よりもこの二文は意味において密接に繋がっている。それゆえに、1においても2においても、

然し自分は今は范の妻の気持を主にして仕舞に殺されて今は墓の下にある、その静さを書きたいと思つた。「殺されたる范の妻」を書かうと思つた。……

と、この二文は接続していたのである²²。おそらく3でも連なっていたのであろう。連なつてはじめて「と思つた」「と思つた」と文末に繰り返しの妙味が生まれ、文章のリズムが生きることになる。これが志賀直哉の文章ではないだろうか。

二文を接続させれば、これを分断することの不自然に気づくが、連接させた1も2もほとんどの読者は知らされていない。読者に与えられていたのは、二文を分断した「城の崎にて」のみであり、読者には与えられたものを受け取るしかすべがないのである。

だが、著者は後にこの分節の誤りに気づいたのではないかと思われる。なぜなら、5と6の「城崎にて」では改めてこの二文を繋いでいるからである。

表3によれば、5では六箇所（3・4・5・7・8・9）で段落の修訂がなされている。段落分けはここで明らかに直されている。そして、その六箇所はすべて新しく生まれた段落であるが、逆に分節をなくして元に戻したところが一箇所ある。それがこの4で分節された箇所（6）である。

そして6でも、やはり段落分けについて全体的に見直しがなされている。5で新しく生まれた六箇所の段落分けを一箇所（8）を除いてすべて元に戻しているのだが、4で分節された箇所（6）の5での再連結は引き継いでいる。

5と6は、7とは違い、著者が明らかに関与しており、その「意向」が具体的に盛り込まれている。5と6での二文の接続は、著者の最終判断であることは間

違ひなからう。と同時にその判断は、初出本文1の最初から一貫していたと見るべきであろう。現在、目にする「城の崎にて」の本文における二文の奇妙な分断は、3における二文の偶然の位置関係がもたらしたものと考えられる²³。

（2）文の推移

1～8の本文のもつ文の総数は次の通りである。

表4 文の総数

本文番号	1	2	3	4	5	6	7	8
文の総数	200	203	208	201	200	200	201	201

段落数と同様、文の数もその等しさは内容の同一を意味しない。1・5・6はいずれも文の総数は200であるが、1と5・6の内訳は異なっている。5・6はまったく同じ文によって構成されており、段落において、6は5で発生した異同を受け入れていなかったが、文においては、吟味しつつ結局はすべてを受け入れたものと考えられる。

4・7・8の文の数は201で内容的にも完全に一致している。それは7と8が4を底本にしてそれを直接、間接に複製した結果であると考えられる。

文の増減の具体的な内容は次のとおりである。なお、文の数は句点および疑問符の数で計算しているが、初出本文だけは、句点のあるべき位置に句点を脱落させている箇所（19・22）があり、それは句点があるものとして文の数に入れている。

表5 文の増減箇所の推移

No.	頁・行	1	2	3	4	5	6	7	8	異同箇所
②	1 4・9	4・3 心配はいらない。 〔なし〕	1 ②	1 2	④ 2	1 2	1 2	4 2	4 2	心配はいらない、 ②山の裾を廻つて ゐるあたりの潭に なつた所に山女が

表6 段落の構成と含まれる文の数の推移

十	九	八	七	六		五	四		三	二	一	章	1				
3	59	16	53	17		11	24		8	4	5	文					
十	九	八	七	六		五	四	三	二	一	章	2					
3	59	16	55	18		11	9	23	4	5	文						
十	九	八	七	六		五	四	三	二	一	章	3					
3	60	16	55	18		11	9	27	4	5	文						
十二	十	九	八		七	六	五	四	三	二	一	章	4				
3	59	15	55		3	13	11	10	24	4	4	文					
十六	十五	十四	十三	十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一	章	5
3	58	14	7	6	29	14	7	9	4	7	7	3	23	4	5	文	
十二	十	九	八		七		六		五	四	三	二	一	章	6		
3	58	14	13		43		16		11	10	23	4	5	文			
十二	十	九	八		七	六	五	四	三	二	一	章	7				
3	59	15	55		3	13	11	10	24	4	4	文					
十二	十	九	八		七	六	五	四	三	二	一	章	8				
3	59	15	55		3	13	11	10	24	4	4	文					

ちなみに、先ほど問題にした、4で発生した改行は、その第六段落と第七段落の間にある。そしてそれは、7と8でも同じく第六段落と第七段落を分かつことになる。

四 語句の推移

(4) 語句

主要八本文における語句の異同は、次の通りである。

表7 語句の推移

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	異同箇所
頁・行	1	2	3	4	5	6	7	8	
電車に	②	1	1	2					山の手線の電車に
怪我した	④	2	1	④	4	2	1	4	怪我をした
一人で	1	1	1	⑤	4	2	1	4	一人
脊椎カリエス	②	1	2	2	4	2	2	2	脊椎カリエス
致命傷だが	4	1	1	④	4	2	4	4	致命傷になりかねないが
兎も角		1	1						兎に角
よかつたのだ。		1	1						よかつた。
往来だの		1	1	④	4	2	1	4	往来だのを
なつて行く		1	1	④	4	2	1	4	なつた
〔なし〕		②	2	④	4	4	2	4	② 潭に④ 小な潭に
〔なし〕		②	2	④	4	4	2	4	② 山女が⑤ 鮠が
〔なし〕		②	2	④	4	4	2	4	② 尚よく見ると
〔なし〕		②	2	④	4	4	2	4	⑤ よく見ると
〔なし〕		②	2	④	4	4	2	4	② 水蟹が④ 川蟹が
〔なし〕		②	2	④	4	4	2	4	水の中に
〔なし〕		②	2	④	4	4	2	4	② してゐるを
〔なし〕		②	2	④	4	4	2	4	④ してゐるのを

41	40	39	38	37	36	35	34	33		32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16
6・9	6・9	6・9	6・8	6・8	6・8	6・6	6・2	6・1		6・1	5・16	5・16	5・15	5・15	5・14	5・14	5・12	5・10	5・10	5・10	5・10	5・5	5・4	5・3	4・14	4・11
働きつゝあつた。 巢の蜂共は 其所に 洗はれた。 晴れて 晩の間に 巢に入つて 様子はなかつた。 一向 たれ下がつて了つた。										たれ下がつて了つた。 ちゝこまつて 足は腹の下に 欄干から 退屈するとは 満開で 飛び立つて行く。 シトミのあはひ シトミの中に なつてゐた。 シトミに これが 自分では 「何時に」 してゐた。 「何時に」 など思ふ。 食事前には																
1	1	1	1	1	1	1	1	1		1	1	1	1	②	1	②	②	②	②	②	1	②	1	②	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1		1	1	1	③	2	1	2	2	2	2	2	③	2	1	2	1	1
④	④	1	④	④	④	④	1	④		④	④	④	3	2	④	2	2	2	2	2	3	2	1	2	1	1
4	4	⑤	4	4	4	1	⑤	⑤		4	4	4	3	2	4	2	2	2	2	2	1	2	⑤	2	⑤	⑤
4	4	5	4	4	1	1	5	5		4	4	4	3	2	4	2	2	2	2	2	3	2	1	2	5	5
4	4	1	4	4	4	4	1	4		4	4	4	3	2	4	2	2	2	2	2	3	2	1	2	1	1
4	4	1	4	4	4	4	1	4		4	4	4	3	2	4	2	2	2	2	2	3	2	1	2	1	1
働いてゐる 今も巢の蜂共は 其所には 洗はれてゐた。 晴れ 夜の間に 巢へ入つて 様子はなかつた。 ④一向に⑤〔なし〕										たれ下がつてゐた。 ぴつたりとつけ 足を腹の下に よく欄干から 退屈すると 咲きかけで 羽目のあはひ 飛び立つ。 羽目の中に なつてゐる。 羽目に それが 自分には 考へてゐた。 「何時か」 などと思ふ。 食事前には																

66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50		49	48	47	46	45	44	43	42
7・8	7・7	7・7	7・7	7・6	7・6	7・6	7・6	7・6	7・4	7・1	7・1	7・1	7・1	6・16	6・16	6・16		6・16	6・15	6・15	6・15	6・12	6・10	6・9	6・9
流れて	出掛けた。	東山公園へ	日本海などの	圓山川から	事だつた。	又間もない	なくなつた	流されて	かゝつてゐた	書きたいと	今は墓の	主にして	然し自分は	書いた	それに	自分は		助長して	生理的方面の	〔なし〕	〔なし〕	忙しく／＼	觸角も	雨どよを	然し
1	②	1	1	②	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		②	1	1	1	1	②	1	1
1	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		2	1	1	1	1	2	1	1
④	2	1	1	2	④	④	④	④	④	④	④	④	④	④	④	④		④	④	④	④	1	2	④	④
4	2	⑤	⑤	2	4	4	4	4	1	4	4	4	4	4	4	4		4	4	4	4	⑤	2	4	4
4	2	5	5	2	4	4	4	4	1	4	4	4	4	4	4	4		4	4	4	4	5	2	4	4
4	2	1	1	2	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4		4	4	4	4	1	2	4	4
4	2	1	1	2	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4		4	4	4	4	1	2	4	4
流れ	出た。	行くつもりで宿を	東圓山公園へ	日本海の	圓山川、それから	時だつた。	間もない	消えて	流され	かかつてゐる	自分は書きたいと	墓の	主にし	然し	書いたが	それは	④助長し	②助長として	生理的	自身の	そして	忙しく／＼	觸角は	雨樋を	が ^s

92	91	90	89	88	87	86		85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67
8・16	8・16	8・14	8・14	8・14	8・13	8・13		8・13	8・13	8・12	8・8	8・6	8・4	8・4	8・4	8・4	8・2	8・2	8・1	7・16	7・14	7・14	7・13	7・12	7・11	7・9
者に訊いた。	もかどうか	自分は然し	致命的の	思つたのである。	後からも	自分は		働いたのを	頭が	行つて直ぐに	鼠のやうな	恐い事だつた。	死ぬと極つた	出来なかつた。	見る事が	最後を仕舞まで	スポン／＼と	吃驚して	洗場前で	さゝれたまゝに	わからなかつたが	人間には	直ぐにつかへた。	石垣へ當つて	這ひ上がらうと	川へ
1	②	1	1	1	1	1		②	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	②	1	1	1	1	1	1	1
1	2	1	1	③	③	③		③	③	1	1	1	1	1	1	1	1	③	2	1	1	1	1	1	1	1
④	2	④	④	3	3	3		3	3	1	1	④	④	④	④	④	④	3	2	④	1	④	1	④	1	1
4	2	4	4	3	1	3		3	1	⑤	⑤	4	4	4	4	4	4	3	2	4	⑤	1	⑤	4	⑤	⑤
4	2	4	1	3	3	3		3	1	5	1	4	4	4	4	4	4	3	2	4	5	1	5	1	1	1
4	2	4	4	3	3	3		3	3	1	1	4	4	4	4	4	4	3	2	4	1	4	1	4	1	1
4	2	4	4	3	3	3		3	3	1	1	4	4	4	4	4	4	3	2	4	1	4	1	4	1	1
友に訊いた。	ものかどうか	然し	致命的な	思つた位である。	後から	自分でも	いた事は	②働いたのは③働	頭の	行つても直ぐに	鼠やうな	恐い事だ。	死ぬに極つた	しなかつた。	見る氣が	最期を	スポツ、スポツと	吃驚し	洗場の前で	刺された儘	わからないが	人間に	つかへた。	石垣に當つて	這ひ上らと	川の中へ

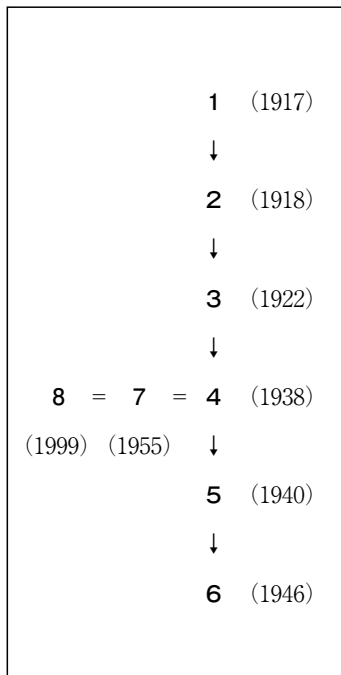
117	116	115	114	113	112	111	110	109	108		107	106	105		104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93
10・5	10・5	10・4	10・2	10・2	10・2	10・1	9・16	9・15	9・14		9・13	9・13	9・12		9・11	9・10	9・9	9・9	9・9	9・9	9・8	9・5	9・4	9・4	9・4	9・3
未だ水に	ゐた。	小さなものが	思つた。	知つてゐたと	〔なし〕	左うしたら	それを暫く	その葉だけが一つ	流れて他は	枝で	桑の路へ差出した	ソワ／＼とさせる	物静かさへが	う歸らうかと	もう歸らうか、も	流れも同様に	段々上へ	添ふて	流れに	してゝあつた(。)	いふ氣がした。	左うは變らない	何かしらん	思つて	左うして	考へてゐる
1	1	1	1	1	1	1	1	1	②		1	②	②		②	1	1	1	1	1	②	1	1	1	1	②
1	1	1	③	1	1	1	1	1	2		1	2	2		2	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	2
④	1	④	1	1	④	1	1	④	2		④	2	2		2	1	1	1	④	④	2	④	④	④	④	2
4	⑤	4	1	⑤	4	⑤	⑤	4	2		4	2	2		2	⑤	⑤	⑤	4	2	2	4	4	4	4	2
4	5	4	1	5	4	5	5	4	2		4	2	2		2	5	5	5	4	4	2	4	4	4	4	2
4	1	4	1	1	4	1	1	4	2		4	2	2		2	1	1	1	4	4	2	4	4	4	4	2
4	1	4	1	1	4	1	1	4	2		4	2	2		2	1	1	1	4	4	2	4	4	4	4	2
未だ	ゐる。	小さいものが	思ふ。	知つてゐると	自分ほもつと	〔なし〕	暫くそれを	その葉だけが	流れの他は	の枝で	路へ差し出した桑	ソワ／＼とさせた	物静かさへが	もう歸らうと	流れも同様	上へ	沿つて	小川に	して(。)	思つた。	さう變らない	何かしら	思ひ	そして	考へてゐる程	

ただし、引き継がれていくと言っても、表9を見ればわかるように、それは機械的に先行する本文で発生した異同のすべてを受け入れているのではない。たとえば、2で新出した異同は34箇所あるが、2に始まって3・4・5・6という本文の展開のなかで、「34↓33↓29↓27↓27」と受け入れ箇所数が変化している。これは、著者が機会ある度に、語句の適否を検討していることを示すものであろう。2と6の本文は、それぞれの本文での新出異同に加え、それまでの本文で生じた異同についても改めて吟味した結果にはかならない。それが初出本文との差異となり、ほかの本文とも異なる固有の本文を形成することになる⁽²⁴⁾。

ところが、7と8にはそういうことがない。新出異同もなければ、独自の判断での取捨もない。ただ、まさしく機械的に4を複製している。それは、7も8も、内容的には4と同じ百三十七個のまったく同じ本文番号が並んでいることとわかる。このため、表9では、1と6の本文と7・8の本文を著者の関与の有無によって区別し、両者の間に波線を入れている。

八本文の系統図を描くと次のようになる。

本文の系統



7も8も本文としてはまったく4に等しいものである。平成十一年生まれの最新全集に所収された8も、実際は昭和十三年に生まれていたことになる。それ以降は7も8も本文としては何の成長もなく、生まれた昭和十三年二月止

まったままなのである。

これに対し、6は8よりも五十三年も早く生まれているが、本文としては8よりも若く、もつとも遅く著者と関わっている。「城の崎にて」の本文としての最終形である6は、それまでの「城の崎にて」に対する著者のすべての関与を総合し、そのもつとも新しい関与をも反映している。いわば、「城の崎にて」の本文の頂点に立っているのである。

おわりに

志賀直哉が城崎温泉に滞在していた大正二年十月三十日の日記に、

蜂の死と鼠の竹クシにさゝれて川へなげ込まれた話を書きかけてやめた。

とあるが、これが「城の崎にて」に関わる著者の最初の記述である。書こうとしたこの「話」は、城崎温泉で著者が「實際目撃した事」⁽²⁵⁾であるという。明治十六年生まれの前著者は、この時ちょうど三十歳になっていた。

翌大正三年には、著者はこの「話」を「いのち」という標題で書こうと試みているが、やはり書きかけで終わっている。「城の崎にて」に関わる文辞はほかにもあるかもしれないが、それは確認できない。

いずれにせよ、大正六年五月には執筆を完了し、「城の崎にて」として『白樺』第八巻第五号に発表される。それは三年におよぶ執筆のプランクがあった後で、著者は三十四歳となっていた。

「城の崎にて」の執筆は、実はそれで完全に終わったものではなかった。見てきたように、『白樺』(大正六年)に発表された初出本文は、その後、『夜の光』(大正七年)、『寿々』(大正十一年)、そして九卷本全集(昭和十三年)に収録される際、その都度、段落、文、語句、句読点について、いわば頭の天辺から足の爪先まで見直され、書き改められていく。そしてその本文は、ついには昭和十五年の『映山紅』所収本文、それを最終的に吟味して成った昭和二十一年の『映山紅』所収本文に到達するのである。『映山紅』では標題も「城の崎にて」と表されることになった。「城の崎にて」はその理想型に向けて、「城の崎にて」から「城の崎にて」へと徐々に彫琢され、磨き上げられていったのである。

著者が大正二年に体験し、すぐに書き留めることを試みた「話」は、昭和二十一年にいたってようやく著者の手を離れたわけである。その間に、実に三十三年の歳月が流れ、当初三十歳であった著者は、このとき六十三歳になっていた。

昭和四十六年十月、著者は八十八歳で没し、それから四十年近い年月が経過した。しかしながら、「もつとも信頼さるべき本文」とは、著者の意向を完全に受け入れた、そして誤記や誤植といった夾雑物を排除した本文をいうのなら、「城の崎にて」のそれは今なお存在しない。

「城の崎にて」の本文の頂点に立つのが、昭和二十一年刊の『映山紅』所収本文「城崎にて」であることが明らかとなった今、それを底本とした定本「城の崎にて」を早急に提示しなければならなくなった。しかし、もはや紙幅も尽きようとしている。それは別稿にゆずりたい。

注

- (1) 拙稿「本文批評の問題点——横光利一の初期作品から——」（『尾道大学芸術文化学部紀要』創刊号、平成14年3月）
- (2) 『現代文I』（東京書籍、平成21年2月）および『高等学校新訂国語総合 現代文編』（第一学習社、平成21年2月）に収録されている「城の崎にて」本文を確認した。前者は、本文について、『志賀直哉全集』（一九七三年刊）によるとし、後者は、『志賀直哉全集 第二巻』によった、と注記している。「城の崎にて」は昭和三十年刊の『志賀直哉全集』でも第二巻に収録されているが、おそらく両者はともに菊判全集とよばれる『志賀直哉全集』（岩波書店、昭和48年）第二巻所収本文によっているのであろう。ただし、前者の『現代文I』では「范の犯罪」に関わる記述をすべて削除している。
- (3) 『志賀直哉全集 第三巻』（岩波書店、平成11年2月）に収録された「城の崎にて」の本文。本稿の本文校異では8の本文となる。
- (4) 文庫本所収本文としては、『小僧の神様 他十篇』（岩波文庫、平成14年10月）所収本文、『小僧の神様・城の崎にて』（新潮文庫、平成17年4月）所収本文を確認した。
- (5) 『志賀直哉集』（日本現代文学全集49、講談社、昭和35年12月）、『志賀直哉集』（日本近

代文学大系31、角川書店、昭和46年1月）、『志賀直哉集』（日本文学全集24、集英社、昭和47年1月）、『志賀直哉』（ちくま日本文学全集、筑摩書房、平成4年11月）などに収録された「城の崎にて」の本文を見た。

- (6) 『映山紅』（草木屋出版部、昭和15年）所収本文（5）および『映山紅』（全国書房、昭和21年）所収本文（6）での修訂。

- (7) 三の「段落と文の推移」で詳しく述べる（表3の6）。

- (8) 重松泰雄「本文批評の方法」（別冊國文學『レポート・論文必携』所収、昭和58年10月）で、筆者は、「本文批評とは、ある文献、ある作品の原稿・写本・版本などから、もつとも信頼さるべき本文^{テキスト}を確定するための批判的処置作業をさす」と述べている。本文批評についての基本的な理解として妥当であると思われる。こうした理解に立つてみると、「城の崎にて」の場合は、本文の全体像が見えていず、したがって「もつとも信頼さるべき本文^{テキスト}」を確定するための底本の検討さえ行えない状況にある。にもかかわらず、いつの間にか特定の信頼のできない本文を底本として「城の崎にて」本文が編まれるようになっていく。

- (9) 現行全集や菊判全集の「書誌」を見れば、二つの『映山紅』には、どちらにも「城の崎にて」ではなく「城崎にて」が収録されていることがすぐにわかる。また、これらの書誌において、「城崎にて」という標題をもつのはこの『映山紅』所収の二本文だけで、他の本文の標題はすべて「城の崎にて」となっている。

- (10) 段落分けについては三の「段落と文の推移」で、語句については四の「語句の推移」で述べている。句読点については三の「段落と文の推移」の表5「文の増減箇所」の推移で句点と読点の交替についてのみ示している。読点の校異表は改めて別稿で提示する。「城の崎にて」は、本稿では、「城の崎にて」または「城崎にて」という標題をもつ作品の総称としても、またそこから「城崎にて」を除いた作品の呼称としても使用している。

- (11) 『志賀直哉全集 第三巻（改造社、昭和13年）所収本文。ここでは4としている。
- (12) 菊判全集（昭和48年）では、「城の崎にて」の本文について、『白樺』誌初出本文（大正6年）とそれに続く『夜の光』（大正7年）所収本文から改造社版『志賀直哉全集 第三巻（昭和13年）所収本文との間に、『寿々』（大正11年）所収本文、『増補 夜の光』（昭和4年）所収本文、一巻本全集（昭和6年）所収本文などがあると述べられている。だが、それらは最新全集（平成11年）では「いくつかの単行本を経て」と略されている。

また菊判全集では、『白樺』初出本文と新書判全集第二巻所収本文との異同を60箇所に渡って列挙しているが、最新全集ではなくなっている。また最新全集では、九巻本全集所収本文で発生した異同について、

「トカゲ」を「蜥蜴」、「ヤモリ」を「屋守」、「いもり」を「蝶螺」とするなど、細かい表記や句読点の修訂がおこなわれている。

と述べているが、きわめて杜撰なレポートである。表7に示すように、「細かい表記や句読点の修訂」に留まらず、たとえば語句では、「致命傷だが」を「致命傷になりかねないが」とする(5)など、合わせて70箇所の異同が発生している。菊判全集と最新全集の間の二十六年間で、「城の崎にて」の本文への理解はむしろ後退している。本文の危うさはこういうところにも見える。

従来の主観的、非科学的な本文批評については、(1)のほか、「本文の変容——横光利一『蠅』の場合——」(『尾道大学芸術文化学部紀要』第2号、平成15年3月)や「『赤い色』と『赤い着物』——本文の生成をめぐって——」(『岡大國文論稿』第32号、平成16年3月)などの拙稿でも具体例を挙げている。

もともと初出においても、純粋に著者の関与だけで本文が出来ているのではない。後の校異表で明らかとなるが、「城の崎にて」の『白樺』誌初出本文には句点の脱落や語句の誤植など印刷工程で生じたとみられるミスが認められる。

(16) 『志賀直哉全集』第22巻(岩波書店、平成13年3月)「書誌」参照。

志賀直哉「全集完了」(昭和12年版改造社『志賀直哉全集』第8巻付録、「志賀直哉全集月報」第9号、昭和13年6月)では、著者は次のように述べている。

校正は今度は自分でやった。京都や奈良に住んでゐた關係で、近年全く人任せであつた校正を久しぶりでやると、相當苦痛な事もあつた。殊に舊い興味を失つた作品を叮嚀に讀まねばならぬ事が、つゝかつた。

(18) 岩波書店版の最新全集『志賀直哉全集』は、その底本について、

本全集本文は、昭和五十八(一九八三)年四月から翌年七月にかけて小社が刊行した第二次菊判全集(全十五巻。昭和三十(一九五五)年小社刊行の新書判全集を底本として作成)を底本とした。

と記している。8にとって7は底本の底本であると述べているわけだが、7以前の本文との関係は明らかにされていない。

(19) 4は3における語句の新出異同12箇所のうち11箇所を受け入れている。表9参照。

(20) 実は2の本文も3の本文と同様にこの二文の間で頁が改められている。はじめの文の終わりの句点が前頁の最終行の行末にあり、頁を改めた次の文はカギで始まっている点も3 Gに等しい。だが、よく見ると、このカギは半字分しかなく、はじめの文字(殺)は行頭からこの半字分だけ下がった位置にあって二文は同じ段落にあることがわかる。

(21) 菊判全集(『志賀直哉全集』、岩波書店、昭和48年)の「後記」による。

(22) 『夜の光』(大正7年)所収本文(2)による。

(23) 同様な誤りが最新全集とその底本となった菊判全集との間にも起きている。「清兵衛と瓢箪」の本文は前後2箇所に「一行アケ」があるが、後の「一行アケ」が菊判全集では見開きの左の頁の一行目に来ていて「一行アケ」がわかりにくくなっている。そのためにこの「一行アケ」を見落としたのであろう、最新全集ではこの「一行アケ」がなくなっている。これは拙稿「志賀直哉『清兵衛と瓢箪』考(上)——テクストの変遷とある瓢箪の〈旅〉——」(『尾道大学芸術文化学部紀要』第5号、平成18年3月)で指摘している。

(24) 6には語句の異同は新出していないが、段落分けでは5での修訂を大きく改めているほか、読点の修訂と思われる箇所なども認められる。

(25) 志賀直哉「創作余談」(『改造』第10巻第7号、昭和3年7月)

(「城の崎にて」ほかの志賀直哉作品の引用にあたっては、断りのない限り、岩波書店版『志賀直哉全集』(菊判全集、昭和48年・昭和49年)所収本文を用いた。本稿は、平成二十二年十一月二十八日、宮城学院女子大学で開催された平成二十二年度全国大学国語国文学会冬季大会においてその概要を発表している。)